調査協力者の妻の就業形態は，子ありGでは半数が専業主婦であり，子なしGでは半数がフルタイムで働いていた．これは，出産を契機に専業主婦となり，子育てに専念する女性が多いという現状を反映しているものであるといえるだろう．

表5．調査協力者の妻の就業形態

	子あり	子なし
フルタイム	4	7
自営業	2	1
パートタイム	3	3
専業主婦	9	3
計	18	14

（人）

４－２．子どもを持つことについての意識

インタビューにおいて行った主な質問のトピックごとに，協力者が語ったプロトコルを抜き出した（資料１参照；子あり/子なしの後の数字は，表１および資料１の協力者の番号と対応）

４－2－1　欲しい子どもの数とその理由

欲しい子どもの数については，理想として２人以上を望んでいる人がほとんどであった．その理由として挙げられているのは，自分自身のきょうだい数やひとりっ子への否定的なイメージ，男女両方の子どもが欲しいという希望であった．

「自分も３人きょうだいだったので，２人だとなんかちょっとさびしいかなと思って.」（子あり 17）
「男女という性別がひとりづつあればおさまりがいい.」（子あり 8）
「理想は男女がひとりづつ.」（子なし 5）
「２,３人いた方が，ひとりっ子より絶対いいかなと.」（子あり 6）
「きょうだいと一緒でがまんを学ぶから，きょうだいが必要.」（子なし 10）

また，実際の子どもの数の見通しに関しては，経済的な負担の考慮が影響を与えていた．その他，育てる上での労力や，現実的に子どもができるかどうかという不安についての言及もあった．

「もう１人ぐらい欲しいなと思いますが，経済的な事を考えると２人.」（子あり４）
「子どもにお金がどのくらいかかるとか，生活がどうなるというのがわからないから，漠然と２人ということですね.」（子なし 11）

「２人で十分ですから．あまり子どもがいっぱいいると生活に及ぼす影響もありますから.」（子あり 16）
「ちゃんと育てなきゃと思うと，目が行き届くかを考えると二人かな.」（子なし１２）
「たくさんほしいなという理想はすごくある．でも年齢を考えると，１人でも出来てくれればありがたいかな.」（子なし 9）

４－2－2　子育て観・教育観

子育てを担当する人については，女性がやったほうがいいという考え方が主流であった．特に「3 歳までは母の手で」という 3 歳児神話が根強いことがわかった．しかし，男性の育児への関与を重要視する意見もあった．

「子どもは女の人が育てた方がいいですよ.」（子あり 7）
「育児は女がするものだと.」（子なし 3）
「３歳までは大事だと思うので，やっぱり 3 歳すぎるまでは専業主婦というか」（子あり 5）
「小さいうちは（妻に）家にいてもらいたいですね．卒園するまではやっぱり家に」（子なし 5）

「子どもの育っていくまでの一瞬というのをやっぱり見ていかなきゃと思う，男も.」（子あり 11）
「大変さも多分かわいいうちだと思うので，積極的に顔を突っ込みたい.」（子なし 9）

教育については，子どもが望むなら大学まで行かせたい，好きな事をさせたいという希望を持つ人が多く，親の経済状態に合わせて子どもの希望を制限するという意見は少なかった．逆に，子どもの希望をかなえるために，子どもの数を制限しようと考えていることがわかった．

「子どもがそれなりに目指しているものがあって真剣に取り組んでいるのであれば，大学に行くまで見たいなと思っています」（子あり 8）
「子どもが何かやりたいと言ったらやらせてあげたい」（子あり 10）

「理想は 3 人だが，教育費を 2 人に投資した方がいい」（子あり 1）
「教育のところはしっかりやりたい．教育にかかるお金は一番心配.」（子あり 14）
「生活するだけでいいというんなら 3，4 人いるかもしれないけど，3 人も大学へやるのは無理でしょう．まして好きな人生を歩んでほしいなんて言ったら，3，4 人もムリだって」（子なし 4）

4－2－3　パートナーとの話し合い

子なしグループは，子どもを持つタイミングについて夫婦で話し合っているとの言及があり，ライフデザインをする上で子どもを持つ時期が重要視されていることがうかがえる．

「結婚して２年は夫婦２人だけでと決めたんですが，その後もなかなか子どもができない．」（子なし 5）
「20 代は独身２人で満喫して，それで結婚して３年から５年でもう落ちつくころだから，子どもをつくって，うちのともそういうふうに話して」（子なし 2）

子ありグループでは，今後子どもを持ちたいと思っていても，パートナーとの話し合いをあまり具体的にはしていない人が多く，妻がもう一人子どもを持つことに消極的であると認識している人が多かった．夫が一方的に，子どもがもう１人欲しいと言うことへの遠慮があるように思われる．

「もう１人生まれると，結局は自分ばかりしわ寄せが来るという思いが（妻には）あるみたいです」（子あり 8）
「２人目という話になると『まだそんな余裕ないよ』ということを言っていました．」（子あり 13）
「今は（これ以上は）『もういいか』と言っている．仕事を休まなければいけないかったりとなると，いろいろ．」（子あり 14）
「（妻に子どもが欲しいと）言って何か言われるの嫌だよね．３人欲しいなと言って，エーッとかね．」（子あり 18）

4－2－4　家事・育児への関与（意欲）

妻もフルタイムで働いている場合は，夫の日常的な家事への関わりの程度が比較的高かった．しかし，夫のみの片働きの場合は，家事はほとんど妻任せであった．

「（家事は）平日はたまにふろを洗ったりとか，洗濯物をやったりすることはあるけど，あんまりやってません」（子あり 5）
「家事ですか．半分半分ぐらいですよ．朝ご飯つくったり，米研いだり．分担は，洗濯はおれあんまりしないですけど，あとはほとんど２人でやってい

ますね」（子なし 5）

育児への関与については，積極的に関与をすることに賛成する人がいる一方で，あくまでも手伝いの範囲でと考える人もいた．現在子どもがいるかいないかは関連がなく，妻がフルタイムで働いている場合，育児への積極性が高いようであった．

「（子育ては）できるだけ土日は可能な限りは接しようとは思っています．」（子あり 1）
「（子育ては）手伝い．あくまでも協力の範囲内で．」（子なし 3）

「父親が積極的に参加するのは非常にいいこと．」（子あり 2）
「やっぱりお父さんが近くにいるのって，いいのかなと自分では思う．」（子あり 11）
「だんなさんも一緒に育児をした方が，家族にとってもいいと思います．」（子なし 5）

４－2－5　子育て・子どもを持つことの負担感

子育て・子どもを持つことの負担感で言及が多かったのは，経済的な負担感についてであった．子ありグループでは，少数ながら子どもを世話するときの負担感についての記述も見られた．

「保育園に預けると，妻がパートに行ってもほとんどが保育代にとられて，あまり残らない．」（子あり 16）
「保険とか学費とかで，当然月々出ていくじゃないですか」（子あり 8）
「一点集中でお金をかけるか，自分の生活の水準をさげるか，最終的にはやはりお金のことだと思う．」（子なし 10）

「子育ては楽しいんですけど，マン・ツー・マンになったときはかなりしんどい．」（子あり 2）
「子育ては自分の思い通りにはい家内から寝．思い通りにいかないときには，やっぱりストレスになるからね」（子あり 4）

４－2－6　育児休業制度の利用

育児休業制度の利用については，とらないという意見が大変を占めており，子あり，子なしグループに違いが見られなかった．とりたいと明言しているのは，全インフォーマントのうち子なしグループの 2 名だけであった．育児休業制度が利用できない理由として，経済的理由や職場の雰囲気などを挙げる人が多かった．

また，育児休業制度を利用する条件として，所得の保障や，制度として徹底する事などをあげる声があった．

「仕事をするのが好きだから，やっぱり考えられないですよね．子どものために休むというのが．」（子あり 18）
「仕事に責任あるから，休めるかもしれないけど休みたくない．」（子あり 17）
「おれは（育児休業制度を）使いたくないけど，とるとしたら妻でしょう．」（子なし 2）

「制度はあっても現実問題使えない，そこを無理して使うほどのことはしないつもり．」（子あり 3）
「勇気がいるし，とったら職場にはいられないと思う．」（子なし 4）
「その辺はおっかないですよ．（職場の人から）どう思われるかということは」（子なし 5）

「社会の中で徹底しだせば，自分もとりたいと思うんですよ．でも当たり前になるのは難しいですよね．」（子あり 8）
「給料８割もらえたら休んでもいいかなと思います．」（子あり 2）
「所得の保障があったらとりたいと思います．」（子なし 8）

４－2－7　子育てから得られること

子ありグループでは，実際に子どもを産み育てた経験から具体的な内容が語られ，総じて肯定的な評価をしていた．子なしグループでは，「自分の分身」「後世を作るという人間としての仕事」といったことを期待していることがわかった．

「自信がついてくるというのかな，自分に．」（子あり 11）
「育児に関わった経験がなければ，家庭を顧みずに仕事に没頭しちゃうかもしれないですね．」（子あり 6）

「子どもがいるから頑張れる.」(子あり 13)
「楽しいですよ，にぎやかにもなるし」(子あり 7)

「やはり僕の分身だからね．後世を作るという人間としての仕事を果たせたと思うのかな.」(子なし 9)
「子どもがいて家族が増えると，価値観と楽しさも違いますし」(子なし 5)

４－３．グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析

インタビュー内容をもとに，グラウンデッド・セオリー・アプローチ法を参考にして，欲しい子どもの数に影響を与える要因間の関係の分析を行った．

まず，インフォーマントの語りのうち，特徴的な内容ごとにいくつかのカテゴリーにまとめ下位カテゴリーとし，それをさらに上位カテゴリーにまとめるという作業を行なった．その結果，中カテゴリーとして「子育てにかかわる意識」「子どもを持つことにかかわる意識」「育児休業制度」「経済的不安」「身体的不安」（子なし G のみ）「妻の意向」（子あり G のみ）「子どもの数」を設定した．また，大カテゴリーとして，「子どもを持つことについての個人の意識」と「子どもを持つことの条件」を設定した．

子ありグループと子なしグループ別に，カテゴリー間の関連を図にまとめた（図１，図２）．

４－３－１．子どもを持つことについての個人の意識：促進要因

「子どもを持つことについての個人の意識」のうち子どもを持つことの促進要因として考えられたのは，中カテゴリーの「子どもを持つことにかかわる意識」に含まれる「子どもを持つ意味」「一人っ子の弊害」「男女のバランス」「経済的楽観視」（子なし G のみ）などの要因であった．

子あり，子なし両グループとも，子どもを持つ事を当然だと考えており，子どもが全く欲しくないという人は 1 名だけであった．また，一人っ子についての否定的な考え方が強く，きょうだいがいた方がいいと考える人が多かった．

さらに，男女のバランスを重視し，もし同性の子どもが２人続いた場合は，もうひとり違う性の子どもがほしいと考える人が多かった．

以上の要因は，子どもを持つことについての規範的で，理想的家族モデルとして社会的に共有されているイメージによるものであると考えられる．全要因の中で子どもを持つことを動機づける要因として考えられたのは，この個人が持つ理想的家族モデルだけであった．

４－３－２．子どもを持つことについての個人の意識：抑制要因

「子どもを持つことについての個人の意識」のうち子どもを持つことの抑制要因として考えられたのは，子なしグループでは中カテゴリーの「子どもを持たない」に含まれるもので，「子どもを持つタイミング」を遅らせたり，「子どもはいらない」など積極的には欲しいとは思わないことがあげられた．

また，中カテゴリーの「子育てにかかわる意識」のうち，「子育て観」を見ると，子あり，子なし両グループとも，３歳までは家庭で母親が育てるという「３歳児神話」が根強く，男性の主体的な育児への関与を疎外している可能性が見

られた.

男性の主体的に育児に関与しようという意識の低さは，直接子どもの数には影響しないが，他の要因を経由して間接的に影響している可能性があると言える.

４－３－３．子どもを持つ条件：抑制要因

子あり，子なし両グループとも，「経済的不安」が子どもの数を抑制する主要な要因としてあげられている．また，子ありグループでは「妻の意向」が抑制要因として働いていることがわかった.

また，子なしグループの「身体的不安」の内容から，子どもが欲しいと思っていても，現実的にできないという現状が少なからずあることが示された.

「育児休業制度」は直接子どもの数に影響を与えていないが，「育児休業制度」を利用することは「経済的不安」を促進するという方向から子どもの数を抑制することがわかった．しかし一方で，「育児休業制度」を利用しないことによって，子ありグループの「妻の意向」を経由して，子どもの数を抑制するという関連がみられ，現状では「育児休業制度」が少子化対策として有効に利用される可能性がないことが明らかになった.

４－４．子ありグループと子なしグループの共通点と相違点

子どもを持つことについて，すでに子どもがいる場合と，まだ子どもがいない場合で考え方が異なるのかについて検討するために，子ありグループと子なしグループの発言の特徴の共通点と相違点の比較を行った．

子どもを持つことに関する促進要因として，子ありグループと子なしグループに共通して見られたのは，「子どもを持つ意味」や「ひとりっ子の弊害」「男女のバランス」などの理想的な家族のイメージについてであり，この点は，実際に子どもが生まれる前と後で，変化がない要因であることがわかった．

一方，子どもを持つことに関する抑制要因として共通していたのは，「経済的不安」についての言及であった．子なしグループは漠然とした不安を述べ，子ありグループはより具体的に「養育費」や「教育費」についての不安に言及しているという違いはあるものの，理想の人数までの子どもを持つことが難しいと感じている一番の要因であるといえる．

そのほか，子どもの数に直接的に影響は与えていないものの，間接的要因として，両グループに共通しているのは，一部の人に根強い「3 歳児神話」を主体とした「子育て観」や，育児休業制度に対する考え方である．両方の要因ともに，男性自身が主体的に育児に関与するという姿勢が弱く，育児は女性任せで，自分も子供の養育者だという当事者意識が薄いことを示す内容であった．

次に，子ありグループと子なしグループの差異についてであるが，実際に子どもを持ち育てている状況と，具体的に子育てを実感していない状況の違いが，現れていた．まず，子ありグループは，子どもを育てることによって得られた「子育てから得たもの」や「男性の役割」「子育ての大変さ」などが実感として語られ，また「経済的不安」の中にも「養育費」など子なしグループには見られない言及があった．

さらに，子どもを持つことに関する夫婦間の意見の温度差が，子ありグループで生じていることが特徴として挙げられ，子どもを育てる上で，妻が何らかの不満を持っている事を察知しつつも，積極的に育児に関与するなどの行動にはつなげていないことが推測された．

5．考察

本調査では，子どもを産み育てる年代の男性が，子どもを持つことについてどのような意識を持っていて，カップルが子どもを持つという決定をする際に男性がどのように関与しているかについて探索的に検討することを目的とした．

まず，子どもを持つことへの意欲に関しては，少子化の現状にもかかわらず，2人以上の子どもが欲しいと希望する人が多かった．いくつかの調査（国立社会保障・人口問題研究所 2002，平成１７年度国民生活白書 2005）でも明らかになっているように，理想の子どもの数としては，2人以上と考えている人がまだ多いのだといえる．

欲しい子どもの数の根拠となっているのは，「ひとりっ子の弊害」や「男女のバランス」などについての共通する考え方であり，この意識によってかろうじて子どもの数の理想が，2～3人に保たれていると考えられる．しかしながら，逆に言えばこれらの規範的考え方以外に子どもを持つ事を促進する要因はなく，今後ひとりっ子の家庭が標準になるなど，現在の規範が崩れれば，子どもを持つことへの意欲はもっと低下する恐れがあると考えられる．

一方で，子どもを持つ事を抑制する要因として考えられたのは，子どもを持つことによってもたらされる負担感であった．しかし男性の言う負担感は，養育費や教育費などの経済的なものに偏っており，子育ての実際的労力の負担については子どもの数の抑制要因として言及していない．これは，男性も子どもを生み育てる環境が厳しいととらえているものの，女性の感じている負担感とは内容的なズレが生じていることを示している．これは，男性が子育ての当事者として実際的な育児にあまり関与していないことによるものだと考えられるが，そのため，育児休業制度の必要性を認識せず，利用に消極的であるといえるのではないだろうか．

また，実際にインタビューの内容からうかがえるのは，子どもがいるカップルにおいて，子育ての労力的負担を理由に妻が今以上の子どもを持つ事を嫌がったり，先のばししようとしていることである．これは，自分自身の子育て労力の負担感の話はほとんど出てこない男性と対照的であり，子育ての実質的負担をしていないがために男性は今以上に子どもをほしがり，子育ての実質的負担をしているがために女性はこれ以上は子どもがほしくないと思っているという，皮肉な結果を示していると考えられる．

ただし，これが全く悲観的な状況だということではない．子どものいる男性は一方で子育てについて肯定的な評価をしており，特に妻と共稼ぎなどの状況的必要性から，比較的子育てへの関与が高い男性の方がより充実感を語っていることから，実際に子育てに関わりだせば，満足感など得るものはあると考えら

れる．また，パートナーの妻も 1 人で子育てを負担することがなければ，もうひとり子どもを持つことへの意欲が高まるのではないかと考えられる．

次に，育児休業制度について検討してみる．育児休業制度が男性にも適用されることは，本来なら子どもを持つ条件の側面から，促進要因として働くはずであるが，現在のところはそのように機能していないことがわかった．現状では育児休業制度をスムーズに利用することが難しく，無理して利用したとしてもその結果，経済的な点や職場での立場について不利益をこうむるという見通ししかもてないためであろう．

しかし，子ありグループの結果から，男性が育児休業制度を活用することによって，妻の育児の負担感を減らし，間接的にカップルが持つ子どもの数を増やすという可能性が考えられる．育児休業制度を促進要因として機能させるためには，「経済的不安」を解消する制度的アプローチと，育児休業制度の利用への抵抗感をなくしていく心理的アプローチの両方が必要である．

最後に，人々が理想の数の子どもをもてるような方策を検討してみる．子どもを持つことへの意欲を高めるためには，経済的，労力的，心理的要因を考慮する必要があると考えられる．

まず経済的な視点では，保育料の負担減，児童手当，教育費の負担減があげられる．しかし，教育費を含む経済的な公的支援が必要という意見が多い中，「支援制度が充実したらもうひとり子どもを持つかといわれると，そうとは言えない」という発言もあり，経済的支援は，現在持つ子どもへの負担感を減らすかもしれないが，子どもを多く持つことの促進になるかどうかは，慎重に検討が必要であろう．

また，労力的な視点では，妻だけが育児を担当する現状を変える必要があると考えられる．山田（2001）の指摘のように，共稼ぎで子どもを育ててきたカップルの生活満足度は，片働きで子育てをしてきたカップルよりも高いという．子育ての時期に共稼ぎをすることは，夫婦ともに仕事と育児の両立をしなければならないため，一時的には負担感が大きいかもしれないが，その後の充実感が高いということを，よりアピールしていく必要があるだろう．

さらに，心理的要因として，子どもを産み育てることが楽しいということの宣伝が必要であると考えられる．「子どもを育てることは価値のある仕事」という言説は，これまで女性のみに向かって発せられており，男性の育児参加を促進しないと思われる．「価値がある仕事」という周囲から価値観を押し付けるアピールをするよりも，「育児をして楽しかった・子どもを持ってよかった」という，個人の実感として「お得感」をアピールする方が，子育てリピーターを増やすことにつながるだろう．また，子どもを産み育てることが楽しかった，とカップルに思わせ，そういった世論の形成をすることで，子どもがいないカップル

に対しても子どもを持つことの促進材料となる．そのためには，経済的負担を減らす，などのマイナスをゼロにもってくるという支援以上に，マイナスあるいはゼロをプラスに転換するような，アプローチが必要だと考えられる．

女性が子育て期に就労することのデメリットや3歳児神話など，女性が育児をしなければならないというこれまでの常識は，発達心理学の研究による知見から事実ではないということが明らかになってきている(たとえば柏木・高橋2003など)．一方の「男性が育児をする」ということのメリットについて，今後はより知見を集積していくことも重要であると考えられる．

6．引用文献

柏木恵子・高橋恵子　2003　心理学とジェンダー　学習と研究のために　有斐閣

国立社会保障・人口問題研究所 2002

平成１７年度国民生活白書 2005

山田昌弘　2001　家族というリスク　勁草書房

表1ー1．調査協力者のプロフィール１

協力者No.	年齢	学歴	仕事	妻の年齢	子ども	同居家族	結婚継続年数	妻の就業	居住	本人の兄弟数	実家の援助
既婚子あり1	34	大学	公務員		4歳，1歳2ヶ月	妻・子２	7	専業主婦	新宿区	4	
既婚子あり2	29	大学	会社員	27	9ヶ月	妻・子	4	専業主婦	中野区	2	
既婚子あり3	28	大学院	公務員	28	5ヶ月	妻・子	3	専業主婦	小金井市	3	
既婚子あり4	31	大学中退	主夫	29	3歳	妻・子	2	公務員		2	
既婚子あり5	35	大学院	会社員	34	1歳	妻・子	9	専業主婦	八王子	3	×
既婚子あり6	36	大学中退	飲食店店長	34	5歳	妻・子	6	パート（子どもが生まれた当時はフルタイム）	中野市	2	×
既婚子あり7	25	高校	介護施設	25	2歳	妻・子	4	金融事務	長野市	2	○
既婚子あり8	30	大学	公務員	29	3歳	妻・子	4	専業主婦	小川村	3	
既婚子あり9	29	短大	自営飲食店	28	2歳	妻・子	3	家業手伝い	穂高町	2	○
既婚子あり10	27	専門	自営建築業	27	8ヵ月	8人	1	専業主婦	飯山市	4	○
既婚子あり11	30	高校	自営理容業	43	8ヵ月	妻・子・両親	1	洋服店店長	坂城町	2	○
既婚子あり12	28	高校	飲食店調理師	31	2歳	妻・子		専業主婦	長野市	2	○
既婚子あり13	34	大学	自営小売店	27	2歳	妻・子	4	家業手伝い（半年前まで専業主婦）	長野市	3	○
既婚子あり14	36	大学院	会社員		2人	妻・子・両親	9	学校事務	長野市	2	○
既婚子あり15	33	大学	公務員	30	2人	妻・子		パート	長野市	2	×
既婚子あり16	33	高校	会社員	32	2人	妻・子		パート	長野市	2	○
既婚子あり17	27	大学	高校教諭	27	9ヵ月	妻・子		専業主婦	飯山市	3	○
既婚子あり18	30		会社員	30	1歳	妻・子		専業主婦	中野市	2	○
既婚子なし1	41	大学	公務員	39	なし	妻	15	公務員	習志野市	2	
既婚子なし2	39	高校	公務員	39	なし	妻	12	公務員	千葉市	3	
既婚子なし3	37	大学	公務員	36	なし	妻	9	保母	八千代市	2	
既婚子なし4	36	大学	会社員	35	なし	妻		パート	町田市	1	たぶん○
既婚子なし5	28	高校	会社員	28	なし	妻	4	看護婦	中野市	2	○
既婚子なし6	29	専門	自営建築業	27	なし	妻	2	専業主婦	長野市	2	○
既婚子なし7	30	高校	会社員	24	なし	妻	4	洋服店店員	長野市	2	○
既婚子なし8	33	専門	会社員	29	なし（妊娠中）	妻	1	ピアノ教師	長野市	3	○
既婚子なし9	34	大学	プロスキーヤー	35	なし	妻・妻の母・妻の祖父	1	保母	山ノ内町	3	○
既婚子なし10	29	専門	飲食店調理師	27	なし	妻	1	専業主婦	長野市	3	○
既婚子なし11	31	大学	会社員	31	なし	妻	4	パート	長野市	2	×
既婚子なし12	32	大学	公務員	36	なし	妻	2	専業主婦	船橋市	3	○

表１-2. 調査協力者のプロフィール２

協力者No.	理想の子の数	理由	実際の子の数	理由	性別の希望	育休について
既婚子あり1	3		2		男２女１	所得補填がなければ無理
既婚子あり2	2		もしかしたら1人	経済的な理由	男女各１	前例がないから取らない
既婚子あり3	3	一人っ子はかわいそう	2		男女とも	現実的に制度は使えない
既婚子あり4	2? 3		2	経済的な理由		
既婚子あり5	3? 4		2	年齢的に	なし	４W　給与保障があれば
既婚子あり6	2		不確定			妻が働いていればとってもいい
既婚子あり7	2	男女ひとりづつ	不確定			女の人が育てた方がいい
既婚子あり8	2? 3	男女ともほしい	不確定		男女とも	社会で徹底しだせばとりたい
既婚子あり9	3	多いと楽しい	3			
既婚子あり10	2? 3	4人はうるさすぎる	2? 3			
既婚子あり11	2	きょうだいは多い方がいい	1	妻の仕事や身体		
既婚子あり12	3					育休後の復帰が難しい仕事なのでとらない
既婚子あり13	3	家庭がにぎやか	3		男の子が生まれるまでは	
既婚子あり14	3	女の子がほしい				有給で十分
既婚子あり15	3	女の子がほしい				家にいる時間が長いので育休は必要ない
既婚子あり16	2		2	2人で十分		取りづらいというか，あり得ない
既婚子あり17	3	2人だとさびしい	2	妻は子どもが一人でも大変そう		迷惑をかけるので休めない
既婚子あり18	3	多い方がいいが金銭的に3人まで	2	ひとまず2人いればいい		仕事が好きだから，考えられない
既婚子なし1	0	欲しいと思ったことがない				育児は女の人がするものだからとらない
既婚子なし2	2				男女各１	とるなら妻でしょう
既婚子なし3	不確定	できたらできたでそれもいい				お母さんが見るのが一番
既婚子なし4	不確定	人数に希望はないがほしい	2	経済的な理由		とったらその職場にはいられない
既婚子なし5	2	3人以上だと子どもがかわいそう	2? 3	4人以上だと経済的に大変そう	男女各１	会社の雰囲気にめげずにとりたい
既婚子なし6	2	きょうだいがいたほうがいい	2		男二人	
既婚子なし7	2	ひとりっこはよくない，経済的に2人	2	経済的な理由	男女とも	制度があるならとりたい
既婚子なし8	2	ひとりはわがままになる	2	男女ひとりづつ，経済的に2人	男女各１	所得の補償があればとりたい
既婚子なし9	2	3人は親がつらい	2	妻の年齢	男女各１	
既婚子なし10	2	ひとりっ子はさびしい	1? 2			長期は無理だし，希望しない
既婚子なし11	2	きょうだいがいた方がいい	2	経済的な理由		会社に迷惑がかかるのでとらない
既婚子なし12	3		1	妻の年齢		使った人を聞いたことがない

図1．既婚男性（子なし）の子どもを持つ事をめぐる意識

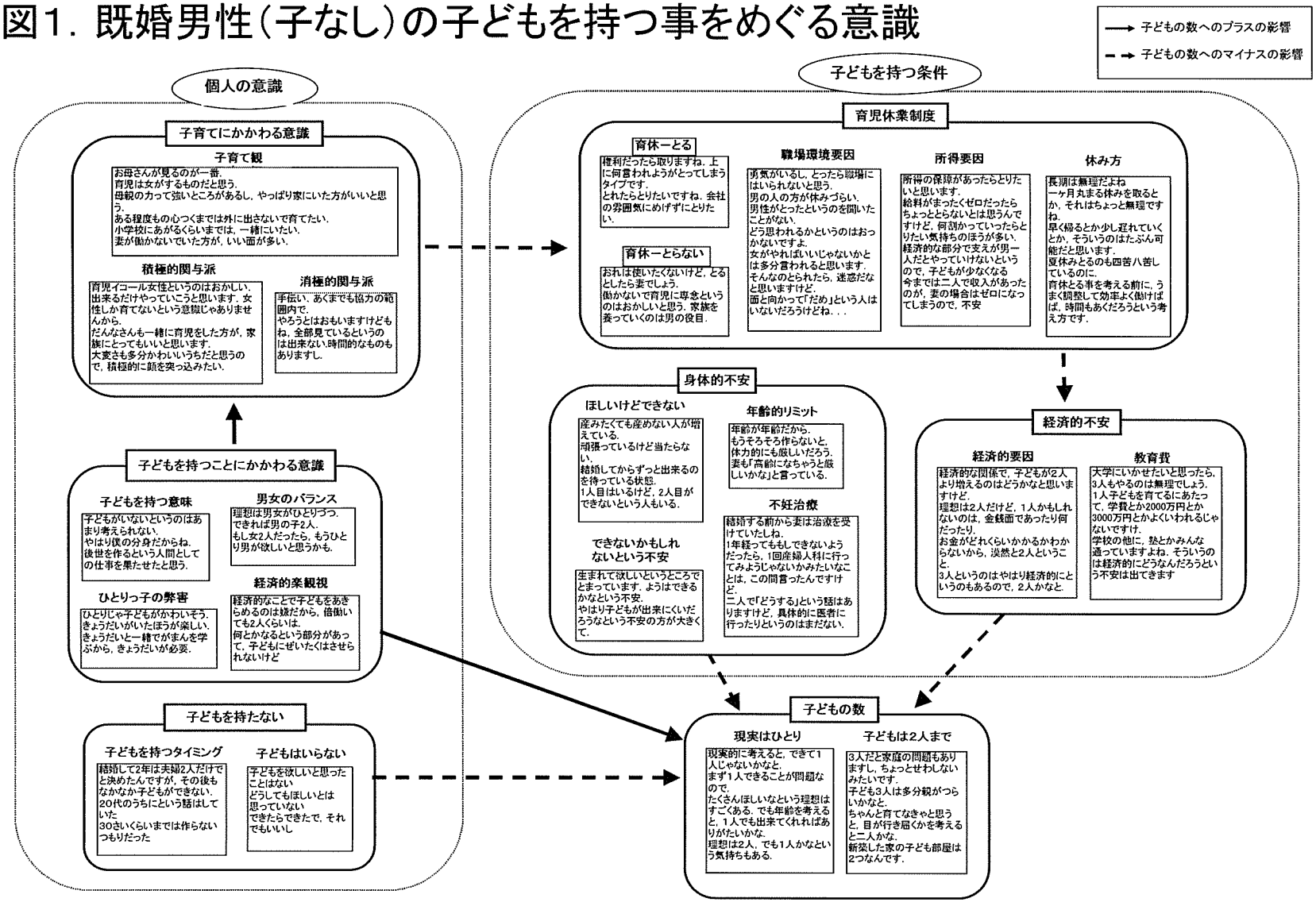
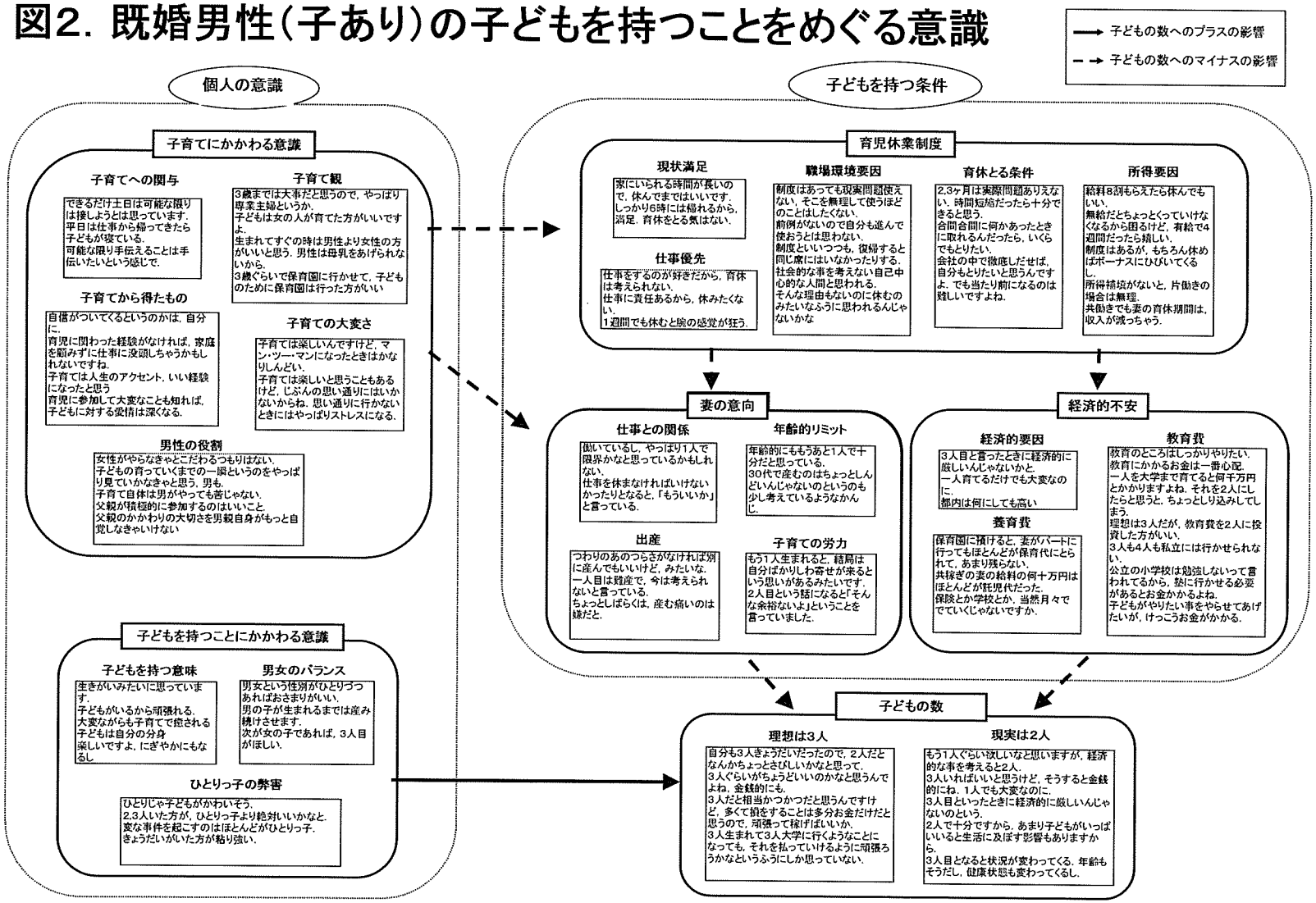


図2. 既婚男性(子あり)の子どもを持つことをめぐる意識



既婚男性インタビュー要約

＜既婚子あり 1，34 歳，東京都新宿区，公務員＞

■子どもを持つことについての夫婦での話し合い
子どもができる前は，何人欲しいねっていう理想はお互い話し合ったことはあるんですけれど．（そのときは二人とも）３人です．
女の子，男の子，両方そろったんで，現実的にはこれで終わりだろうなというふうに今妻とも話しています．
今は，２人でいいかなってお互いの合意をしています．

■ 子どもの数
理想の子どもの数は，私は３人ですね．
本当はもう１人男の子．でも，現実は多分これ（二人）で打ちどめだろうと．
教育にかかる費用とかそういうのを考えると，２人に資源を投資したほうがいいのかなと．

■ 子育て観
上の娘は（5 歳で）幼稚園に入れて，下の息子はとりあえず３歳になる年までは家で育てて，それから幼稚園に通うという感じですね
３歳になるまではちゃんと母親が一緒にいてあげて育ててくれたほうが安心だなという気持ちは持っています．

■ 育児へのかかわり
実際問題，仕事から帰ってきたら子どもが寝てるとか．
できるだけ土日は可能な限り接しようとは思っています．
ミルクをあげたりとか．おむつかえとかですね．

■ 家事へのかかわり
家事はないですね．

■ 育児休業について
制度があると思います．その制度自体を使うかどうかって言われると，やはり使わないと思います．

休業中の所得の補てんってないじゃないですか．だから，片方だけで働いている場合は，現実的にそれはもう無理．

■ 妻の社会復帰
子育ての期間は（妻が）多少家事に専念する，育児に専念するというか，そういうことはお互いで話し合ったことがあります．
行く行くは家庭に入って，家事もこなしながら仕事も家でやりたいというのが彼女の希望です．

■ 周囲の子どもの数
うちの同級生は３人が何人かいます．
３人いる方っていうのは，やっぱり就職した時期ぐらいに結婚している人とか，やっぱり 20 代の前半で結婚した人はもう３人いますよ．

沖縄は結構３人くらいが多いんです．ただ，僕らの年代ぐらいになってくるとやっぱり経済的な負担とかがネックになって，本当は理想は３人なんだけど，男の子と女の子がそれぞれ２人いたらそこでやめとこうかという友人もやっぱり多いですね

■子育てのポジティブな面
子どもに接している，愛情をかけてる自分が安らいでいるというのは，やっぱりあるんじゃないですか．

■教育観
教育に関してはほぼ妻のほうに頼っている感じです．

■育児環境
地元にいるときは，たまに子どもを預けたりとか面倒を見てもらったりとか，経済的な支援というか，たまに子どものお小遣いをもらったりとか．東京に来てからはほとんどないです．

■ その他
いいことだと思います，父親も積極的に参加するというのは．小っちゃいころから子どもに愛情をかけていくことが，将来の非行とか…….

＜既婚子あり 2，29 歳，東京中野区，会社員＞

■子どもを持つことについての夫婦での話し合い
　結婚する前はやっぱり２人って言ってましたね．２人欲しいね，男，女．
（二人目については）まだ真剣じゃないけどね．けど，ちょっとギャグベースで，欲しいよなみたいなことを，にやにやしながら．

■ 子どもの数
理想の子どもの数は，今だと２人かな．
もう１人欲しいなら女の子ですね．
２人欲しいけど，もしかしたらこのまま１人で行くかもしれませんね．それは，経済的な理由も結構あるかなと．
１人を大学まで育てるには本当に何千万とかかかりますよね．それを２人にしたらこんな大変なんだなというのを考えると，ちょっとしり込みしてしまうところがあるけど，でも２人欲しいな．

１人っ子の子というのは，すごい構われる反面，甘やかされたり思いやりがない人がいたりするので，年とって思うんですけど，やっぱりきょうだいっていいなと．

（教育費が安ければ）そうしたらもう３人４人でもいいかなと思いますけどね．

東京とか大阪だったら居住空間が保てないから，３人だと絶対一人一人には部屋与えられないから，それはかわいそうかなという気がするんです．

■ 子育て観
（保育園に入るのは）４～５歳かな．（小っちゃいころは）やっぱりしっかり家で育てて
子どもも成長して，そろそろ集団生活に参加する，保育園に参加することで子どものいい成長につながるんであれば，早い段階で保育園に入れるのがいいかなと思うんですけど，親が働きたいから，嫁さんが働きたいから行かすという発想には多分ならないかな．

■ 育児へのかかわり
僕の主な仕事は，お風呂を入れる
子育ては楽しいんですけど，マン・ツー・マンになった場合にかなりしんどいな